

## CHOSHI (第1話)

(令和3年6月)

『ピッチャー、川口。』

中学野球鹿嶋杯1回戦 0-0の4回表。清真中のエース川口がマウンドに上がった。

約1ヵ月半ぶりの登板だった。川口は中1からエースだったが、清真中は部員不足のために、近隣の中学校と合同チームを組んでいた。守備関係の練習不足から、負けることが多かった。

それでも川口は、中2で県東地区選抜選手に選ばれた。中2の秋、背が高くなったことで、球離れのタイミングにズレが生じ、右バッターのインコースのボールがシュート回転し、デットボールを与えることが多くなった。しかし、冬にフォームの修正し、徐々にコントロールが改善されていった。

中3の5月。それまで合同チームを組んでいた市内の中学校が1年生の入部により単独チームになり、合同チームは解消。中1生を入れても7名しかない清真中は大会出場すら危ぶまれる状態になった。

中学野球部顧問の押見は部員が足りないチームとの合同チームを模索した。すると、神栖一中が中学3年生1名で、何名かの中学1年生が入部したが、単独チームは厳しいのではないかという情報を得た。押見は神栖一中の野球部顧問の染谷先生に電話をした。『もしもし、押見です。今、合同チームになっていただける学校を探しています。もし、9名いないのであれば、清真と合同を組んでいただけませんか？』染谷先生は快諾してくれた。押見は話しを続けた。『うちには県東選抜でピッチャーをしている川口がいます。しかし清真にはキャッチャー経験のある選手がいません。キャッチャーができる子はいませんか？』すると1年生の中に少年野球でピッチャーとキャッチャーをやっていた子がそれぞれいるので、できるかもという返事をいただいた。

翌週、第1回目の合同練習を行った。すると意外な人に会った。かつて、波崎の中学校を率いていた名将菅宮先生だ。『押見先生、久しぶり。しばらく現場から離れていましたが、よろしくお願ひします。』すると名将は川口の方を見た。『あれが川口君か。早速、うちの1年生に捕らせよう。』ということで投球練習が始まった。

川口の投げるボールを神栖一中の1年生はいい音を立てて、軽快に捕った。『想像以上だな。』菅宮先生がつぶやいた。『押見先生、このチームの監督、俺にやらせてくれないか。』菅宮先生の目が昔の目に戻っていた。

## CHOSHI (第2話)

菅宮監督は、新チームの初陣である鹿嶋杯しか総体前の実戦練習はできないことから、敢えて神栖一中の1年生をマウンドに上げ、新チームの守備力をチェックした。しかし大会なので、負けたら次の試合の機会が失われてしまう。そこで、4回から満を持して川口を登板させた。

『ピッチャー川口。』キャッチャーとサードは神栖一中の一年生。1塁は昨年、一人で神栖一中野球部を守った3年生。ショートは川口と二人で清真中の野球部を守った3年の菅澤、セカンドとセンターは少年野球の経験のある清真中1年の渡邊と小沼、レフトとライトは清真中2年生の篠塚と郡。そして菅宮監督。大会直前に役者が揃った。

川口の大きくふりかぶったモーションから、伸びのある速球に観客は息をのんだ。メンバーが揃ったことで、川口のボールもさらに伸びを増しているように見える。

『噂には聞いていたが、ここまでのボールとは。』試合を見に来ていた神栖一中の校長先生、相手中学校の監督、そして見ている人からもそんな声が聞こえてくるようだった。結果、川口は後続のバッターをほとんど三振にとり、試合は神栖一・清真合同チームが勝った。

翌週は、2回戦で優勝候補の一角の中学校と対戦した。ここで一つ問題が発覚した。相手は強力打線なので、川口が切れのあるスライダーも投げたのだがキャッチャーが捕れない。もしくは捕れたとしても、ボールを捕ることで必死になってしまって、バントなどの相手の揺さぶりになかなか対応できない。

『優勝候補になると、ただ打つだけでなく色々な方法で守備の乱れをついてくる。そのためにはあまりにもチームとしての経験がたりない。』そして、さらに困ったことになった。

新型コロナウイルス感染拡大により、神栖市に県独自の蔓延防止が発令された。そうすると市をまたいでの合同練習をすることができない。結果、総体まで試合はおろか合同練習さえ出来なくなった。『折角、メンバーが揃ってこれから3週間、充実した調整が出来ると思ったのに。』私以上に選手、そして菅宮監督は悔しいだろう。とにかく、自チームで出来ることをして大会に臨むしかない。コロナ禍の中、予定の立たない日常に選手や保護者は巻き込まれていた。

## CHOSHI (第3話)

押見は入試広報部長だったので、5月～10月は近隣の中学校に清真の高校入試を説明する、いわゆる『外回り』の時期だった。

6月は銚子の中学校を回っていた。銚子大橋を渡ると、いつもたくさんのかもめが迎えてくれる。銚子は東日本屈指の港町だ。駅近くにある旧銚子四中の銚子中を訪問し、その後銚子三中、銚子一中と訪問した。

銚子三中と銚子一中の間には『銚子市野球場』がある。私は時間調整のため『銚子市野球場』に寄った。銚子の野球と言えば、昭和48年の作新学院の江川卓との2回戦があまりにも有名だ。怪物と言われた江川卓は1回戦の柳川高校戦で23個の三振を奪い、2回戦で銚子商業と対戦した。銚子商業のエースは2年生の土屋投手。1年生には後に巨人で活躍する篠塚選手がいた。この試合の幕切れは、雨中の延長12回、江川のサヨナラ押し出しで銚子商業が勝った。最後の1球はボールになったが江川卓自身『高校時代、最高のボールだった。』という伝説のゲームだ。銚子商業は翌昭和49年、3年生になった土屋投手、名将斉藤監督により全国優勝を成し遂げた。銚子市民の『大漁旗』による応援は、全国的にも有名になり、銚子商業打線は『黒潮打線』と恐れられた。故水嶋新司さんの漫画『球道くん』にも銚子商業をモデルとした学校が登場した。『銚子市野球場』は野球の街、銚子の象徴的な場所だった。

銚子一中に行くと、玄関にたくさん優勝旗が飾ってあった。まだ時間があるのでしばらく見ていると、かなり昔のものもあった。昭和60年、50年、40年……、銚子一中野球部は昔から強かったんだなと見入っていると、後に見知らぬお爺さんが立っていた。

私はお爺さんに声をかけた。『すごいトロフィーの数ですね。銚子一中の野球部は昔から強かったんですね。』するとお爺さんは『そうだよ。俺が中学の頃は、斉藤先生が監督をしていてそりゃ強かったよ。』と教えてくれた。『斉藤先生って、あの銚子商業で全国優勝をした斉藤監督ですか。いつ頃の話ですか。』

『いつ頃かな。俺が中学校の時だから。その時に、銚子商業の応援に甲子園に行ったんだよ。あの頃は町中が応援に行ったよ。あの時の銚商もいいピッチャーがいてよ。強かったよ。』

『そのピッチャーってプロで活躍した木樽投手ですよ。知っています。その時、応援に行かれたんですね。』すると、お爺さんはこう答えた。

『違うよ。もちろん木樽の時は準優勝したけど。俺が甲子園に行ったのはもっと前。確かピッチャーは……藤本、藤本さんの時だよ。』

僅かな時間だったが、銚子の野球の歴史の奥深さが感じられた。目の前にある銚子一中のたくさん優勝旗が、静かに語りかけてくるようだった。

## CHOSHI (第4話)

合同練習が出来なくなった清真中だが、以前合同チームを組んでいた市内の中学校と練習試合を行った。しかしながら、相手中学校は9人、清真は7人なので相手中学校の先生と、清真の外部コーチに外野を守ってもらい、変則の練習試合を行った。

清真は最終回まで川口を温存した。貴重な練習試合で他の選手をマウンドに上げ、ピッチャーとしての経験を積ませる狙いがあった。そして最終回、満を持して川口が登板した。押見は川口に一つ課題を出した。

球離れが早くシュート回転する癖は、改善されていたがまだ完璧ではなかった。そのため右バッターにはアウトコースを中心とした攻め方になっていた。しかしこれでは、シード校などの強豪にはコースを合わされてしまう。そこで、キャッチャーにわざと右バッターのインコースに構えてもらうことにした。

相手の中学校は1年生もたくさん出場しているため、もしボールがシュートすれば逃げることはできない。少々危険な荒療治だが、これが総体前最後の試合であるし、こんなことを躊躇していれば大会で勝つことは厳しい。

川口のボールは空気を切り裂き、キャッチャーのミットに収まった。最早、野球の試合をピッチャーとキャッチャーと審判だけでやっているようになった。川口は全てのバッターを三振にとった。

試合後、野球部の保護者と話をしながら、大会前の日程を確認していた。すると川口君のお爺さんが、川口と話しをしていた。お爺さんはいつも笑顔で孫の試合を見に来たので、今日のピッチングに満足されたと思っていたが、いつもより力の入った感じで川口に話しをしていた。

『川口さん。いつもお世話になっています。押見です。だいぶコントロールが安定してきましたね。大会も楽しみですね。』と言うと、お爺さんはこう言った。『いや、まだまだですよ。インコースを投げる時に、ボールをおきにしている。コースもまだ高いよ。』私はビックリした。自分も感じていたことをしっかり見抜いていたからだ。『お爺さん、野球詳しいですね。どこかでやられましたか。』お爺さんは答えた。『銚商で少しね…、それと先生、私は川口じゃありませんよ。川口は、娘の旦那の名字なので。私は藤本、藤本忠勝です。』

『藤本……。はつとした。そしてお爺さんが帰ったあと、銚子商業野球部OBでプロや社会人、大学野球で活躍した卒業生の進路を調べた。』

1961年。岡本謙治。関根知雄。芝野靖夫。中居一雄。藤原進。藤本忠勝。

## CHOSHI (第5話)

(昭和29年)

かもめの群れが銚子港の上空を飛んでいる。親潮と黒潮がぶつかり合う銚子は東日本最大の水揚げを誇る港町だ。昭和28年に銚子商業が春の甲子園初出場。戦後の復興がすすみ、町は活気に溢れていた。

観音駅から前宿町に向かって坂を登っていくと、野球専用球場『銚子市野球場』がある。来週からそこで『銚子市内小学校野球大会』が行われることになっていた。

海沿いの清水小と明神小が強く銚子駅周辺の商店街に隣接している興野小は清水小や明神小には勝てなかった。小学校の野球大会は全校応援で行われ、銚子の小学校最大の行事だった。

『来週から野球大会ですが、5年生から出場できます。だれか6年生と一緒に練習する人はいませんか？』興野小の5年生の担任はクラスの男子に呼びかけた。『俺、参加します。』下田と小林という男子生徒2名が手を挙げた。

『藤本、お前もやろうよ。お前の球なら、6年生にも通用するよ。』藤本は下田と小林に誘われて放課後の練習に参加した。

練習は6年生中心に行われていた。藤本は練習を見て思った。『これじゃ、本格的な練習をしている清水小や明神小と試合をしたら大差で負けてしまう。』練習は、バッティングになった。『だれか、バッティングピッチャーをしてくれないか。』顧問の先生がそう声をかけた。

『先生、やります。』藤本がマウンドに上がった。はじめは7分程度の力加減で、コントロールを重視して打ちやすい真ん中だけを投げた。『ほうー。藤本君はフォームもきれいだし、コントロールもいい。本気で投げたらどうなんだ？ 本気で投げてみる。』藤本は大きく振りかぶって渾身のストレートを投げた。すると、ボールはうなりをあげてキャッチャーミットに収まった。

『藤本君。速いじゃないか。』よし、今度の大会は藤本君に投げてもらおう。すると、ボールを受けたキャッチャーの6年生が先生を呼んだ。『先生！ 藤本の球は速すぎて捕るのは嫌です。別なポジションにしてください。』先生は困った顔で『だれか藤本のキャッチャーができる奴はいないか。』と呼びかけた。『俺出来ます。』5年生の下田が手を挙げた。下田はキャッチボールで、ずっと藤本のボールを捕っていた。『よし、今年の大大会のエースは藤本だ。』興野小野球部の新たな歴史の始まりだった。

## CHOSHI (第6話)

5年生の藤本がピッチャーになって、興野小はいい試合をするようになった。そして、6年生の春の大会、興野小は勝ち進み、準決勝で明神小と対戦した。

明神小のエースはこの代の銚子N o 1ピッチャーと言われていた芝野。キャッチャーは鉄砲肩の小知和。芝野と小知和は銚子N o 1のバッテリーだった。

試合は、芝野と藤本の投手戦になった。最終回まで0-0。しかし、興野小には中居というスラッガーがいた。

最終回、ランナーをおいて、ついに中居は芝野の球をとらえた。そして打球はレフトオーバーのサヨナラヒットになった。

翌日の決勝の相手は清水小。球場は満員だった。興野小が決勝に行くことは初めてだったので、町内中の人達が仕事を休みにして、応援に来た。一方、清水小も銚子の小学校の盟主として、興野小には負けられない。銚子市野球場は小学生の大会とは思えないほどの熱気につつまれていた。

清水小は強かった。1番の関根はどんな球でもバットに当てることができる天才打者でこの大会の打率は7割を超えていた。そして4番は体ががっしりし銚子N o 1スラッガーの藤原がいた。関根と藤原は藤本の球をとらえた。

興野小も打ち返したが、試合は6対3で清水小が勝った。この試合で藤本は点をとられたが、興野小は守備を鍛え、また藤本もさらに制球をみがき、6年生最後の秋の市内大会では興野小が優勝した。藤本は名実共に、この世代の銚子のエースになった。

中学生になると、清水小と明神小の生徒は銚子一中に、興野小の生徒は銚子四中に入学した。野球の強い2校から生徒が入学する銚子一中は、銚子の中学校の大会で常に優勝する強豪校だった。他にも銚子市野球場のすぐ横にある銚子三中や犬吠埼にある銚子二中が強かった。商店街の子供達が多い、銚子四中はこれらの中学校にいつも負けていた。

藤本が入学すると、銚子四中の校長先生が話しかけてきた。『君が藤本君か。確かにいい体をしておる。ただ中学生になったらさらに体を鍛える必要がある。しっかり食べて、怪我なく練習に励むように。』

藤本は体育が得意だった。ある日の体育は跳び箱だった。藤本が跳ぼうとすると、体育の先生が止めに入った。『藤本君。校長から君が怪我する可能性がある競技はやらせないように言われている。みんなが跳び箱を跳んでいる間は、校庭を走ってもらえないかな。』藤本は野球に専念できるよう、色々なことが特別扱いされた。

## CHOSHI (第7話)

藤本は中学1年生の秋から銚子四中のエースになった。2年の春の市内大会は準優勝。2年の秋は東総大会に出場した。県選抜大会では銚子三中与対戦した。

試合は7回まで0対0。延長に入った8回に2アウト3塁のピンチを迎えた。藤本にとってはバッターを抑えればよい2アウト3塁は大したピンチではなかった。しかし、3塁ランナーが、藤本が投げる直前に大きなリードをとった。

『刺せる。』藤本は3塁に牽制球を投げた。

『ボーク！』3塁の審判が大きな声で『ボーク』の宣告をした。ボークとは不正投球を意味するが、3塁に牽制球を投げただけでは、ボークにはならない。牽制球を投げる時に踏み出す左足がきちんと3塁を向いていれば問題は無いのだが、3塁塁審は左足がホームの方を向いており、3塁ランナーをだますような牽制に見えたということなんだろう。バッターを抑える自信のある藤本が相手をだますような牽制を投げる理由は無いのだが、このボークによって、銚子四中はサヨナラ負けになった。

藤本はボークには納得いかなかったが、次からは力で相手を圧倒するようなピッチングをしようと思った。そしていよいよ3年の春の大会を迎えた。

銚子四中は順調に勝ち進み、準決勝は再び銚子三中だった。同じ日に銚子一中と銚子二中の準決勝もあり、勝ったチームの決勝戦はその日のうちに行う日程だった。

銚子市野球場は超満員になった。漁師の家が多い、銚子一・二・三中の親たちは大漁旗を振って応援した。

藤本はこの大観衆の前で、最高のピッチングをした。藤本の球はさらに速くなり、力で銚子三中のバッターを圧倒した。一方、銚子三中もしっかり守った。ピンチでは4番の中居との勝負を避け、四中の打線を分断した。試合は7回が終わっても0-0だった。8回、9回、10回、11回、12回……、お互いに一步も譲らない。藤本は点がとられる気はしなかったが、心配があった。

この試合の後、休憩なしで銚子一中との決勝戦がある。疲労が残った状態で、関根、藤原、芝野、小知和らの強力打線を抑えることができるのだろうか？藤本の心配をよそに、0は続いた。13回、14回、15回、16回、17回、18回そして19回。ついに銚子四中は相手のミスからチャンスを広げ、1点を取った。そして藤本が締め、延長19回の死闘を制した。

『30分後に決勝戦を行います。』日没が迫る中、藤本の疲労などお構いなしに、次の試合の開始時刻がアナウンスされた。

## CHOSHI (第8話)

藤本は疲労困憊で、銚子一中と戦うことになった。銚子一中の打順は一番 関根、二番 小和知、三番 芝野、四番 藤原……の強力打線。監督は後に、銚子商業を率いて昭和49年に全国優勝をした斉藤監督だった。最強ともいえる銚子一中に延長19回を投げきった直後の藤本は真っ向から立ち向かった。

球場にいる誰もが、藤本はいずれ銚子一中につかまると思っていた。しかし、藤本は強打者でも、当てるのが精一杯のスピードと切れのあるボールを投げた。スコアボードに0が並び、延長9回までゲームは進んだ。外は暗くなり始めていた。

銚子一中の斉藤監督が審判と話し始めた。藤本は今日一日だけで28イニング投げている。1イニング15球投げるとすれば、400球以上投げている計算になる。そして審判が、ホームベースに並んで、日没サスペンデッドゲームを宣告した。まだボールは見られる状態だったが、藤本投手の肩の疲労を気遣った、敵将斉藤監督の配慮だった。

翌日の再試合は銚子一中が2対0で勝ち優勝。しかし秋の大会では銚子四中が雪辱を果たし、初優勝を成し遂げた。銚子四中は東総大会に出場したが、エース岡本、4番でキャッチャー海上を軸とする飯岡中に1点差で敗れた。

中学野球の試合が全て終わり、藤本は家からも近く、前年、甲子園夏の大会に出場した銚子商業に進学することにした。そして銚子商業に合格し、チームメイトだった中居、下田、小林と一緒に野球部の初練習に行くと、そこには銚子一中の関根、藤原、芝野、小和知、東総大会で負けた飯岡中の岡本と海上を含め約80名の一年生の猛者達があった。

そして厳しい練習が始まった。4月10日、皇太子殿下の結婚式の日、全体練習は休みだったが、一年生が先輩に呼び出された。『今日は、一日走ってもらう。まず、学校から犬吠埼の先までランニング、その後暗くなるまで、坂ダッシュだ。』一年生は真っ青な顔していると、先輩は藤本の所に寄ってきた。

『藤本、お前は学校に残って別メニューだ。』そして一年生がいなくなると先輩はこう言った。『藤本、お前はここで少し走って、みんなが帰ってくる前に終わりにしていいぞ。お前に怪我をされてしまっは、監督に死ぬほど怒られる。だからお前はランニングをしたふりをして帰っていいぞ。』藤本は野球以外の練習はあまり好きではなかったので、『助かった。』と思って、少し走って暗くなる前に家に帰った。



## CHOSHI (第9話)

(令和3年7月)

神栖一・清真合同チームの総体1回戦の相手のエースは川口と同様に県東選抜に選ばれている選手だった。打順は共に1番。右投げ左打ちまで同じだった。

試合は予想通り、両エースの投げ合いだった。川口は相手打線をよせつけなかったが、5回エラーからピンチがおとずれた。1アウト2塁。ここで追い込んだ川口は三振を狙って、スライダーを投げた。すると真ん中から落ちながら曲がるスライダーをキャッチャーが後ろにそらした。通常は2塁ランナーの進塁は3塁止まりだが、学校の野球場とは違い、正式な球場はフェールグラウンドが広い。相手中の監督が大きな声で叫んだ。『回れ。』相手のランナーは一か八か、本塁に突っ込んできた。おそらく川口からヒットは難しいので、勝負をかけてきたのだろう。川口は冷静に本塁カバーをし、キャッチャーからもいいボールが返球されアウトになった。

0-0で最終回7回裏、神栖一・清真合同チームの攻撃。2アウトランナー無しで9番の郡になった。押見はふっとある考えが浮かんだ。『同点のままなら、次の回からは特別ルール(ノーアウト1・2塁からの継続打順)になる。郡がアウトになれば、次の回はノーアウト1、2塁で1番の川口から始まる。そうすれば大量点をとれる可能性がある。』押見はこのことを郡に伝えようかと迷っていると、菅宮監督が郡を呼んだ。『お前が出て、この回でゲームを決めるぞ。絶対、出塁しろよ。』

9番郡はエラーで出塁。そして、1番の川口がライト前にヒットを打ち、郡の好走塁で、1・3塁となった。次のバッターは川口の球を捕っている神栖一中の1年生だった。名将菅宮監督は、打席に行く前にバッターに指示を出していた。『当てにいくな。フルスイングをしろ。』初球、1年生はフルスイングで空振りした。相手中のエースはこのスイングを見て、三振を狙いにいった。2球目。決め球のスライダーが真ん中からきれいに落ちた。

バッターは空振りしたが、切れがよすぎたために、キャッチャーは後ろにそらしてしまった。そして、3塁から郡が生還し、1対0。神栖一・清真合同チームはサヨナラ勝ちした。川口はノーヒットノーラン。両投手とも見事なピッチングだった。

2回戦では、シード校相手に守備が乱れ、3対5で負けた。チーム練習がもう少しできたら、シード校ともっといい勝負が出来たかもしれないと思うと残念だった。川口は県東地区から2名しか選ばれない、県選抜に選ばれた。しかし、8月後半からの緊急事態宣言のため、県選抜の関東大会は10月に延期され、8月・9月の選抜の練習会も中止になった。

## CHOSHI (第10話)

(昭和34年)

夏の大会のベンチ入りが発表された。1年生では藤本だけが、ベンチ入りになった。レギュラー組の藤本が練習を終え、部室に戻ろうとすると部室の中から雑用をしている1年生の声が聞こえた。『俺、もう野球部を辞める。どうせ、いくら練習しても、いくら雑用をしても、このままベンチにすら入れないで高校3年間終わるんだ。いつも藤本ばかり特別扱いされて。もうやってられない。』藤本が部室に入りずらそうにしていると、後ろに海上が立っていた。海上は部室のドアをあけた。『おい、今、文句を言っていた奴、さっさと辞めろ。俺は甲子園に行くために野球をやっているんだ。藤本がエースでなければ、甲子園に行けないんだ。藤本の後ろを守る気のない奴は、さっさとここから出て行け!』

結局、夏の大会が終わる頃には半数の一年生が辞めていった。3年間最後まで残った部員は13名だった。

夏の大会が始まった。先輩達も強く甲子園が期待されたが、その夢は叶わなかった。そして大会後に1・2年生の新チームが結成され、藤本はエースになった。

藤本がエースになった銚子商業は強かった。秋の千葉県大会優勝。関東大会では慶應高校に惜敗したが、周囲の期待は高まり、来年の夏こそは甲子園に行けるという機運が盛り上がった。

しかし、藤本はこの頃から肩の異変を感じていた。小学校からずっと一人エースで投げてきた疲労がたまっていた。勝ち進むと連戦になるので、さらに肩に負担がかかることになった。藤本は周囲の期待に、自分の肩がもつのか心配だった。そして、春になると、肩の違和感がはっきりし始め、5月に行われた春の大会ではベスト16で負けてしまった。

そして、ついに藤本の肩が悲鳴をあげた。肩は全く上がらなくなった。藤本は千葉医大で緊急手術をした。しかし、高2の夏の大会に間に合うことは無く、藤本はベンチにすら入れなかった。そして、銚子商業は千葉地区予選で負け、甲子園に行くことはできなかった。

手術をしても、藤本の肩が昔のようにあがることは無かった。『もう、マウンドに上がることは無いだろうな。』藤本は、そんなことを思った。退院すると、自宅には小学校からの同級生の下田や小林、中居そして銚子四中の時のキャッチャーをしていた春日小の岩瀬が遊びに来て、現在のチームの様子を教えてくれた。『新チームは飯岡中の岡本がエース。キャッチャーが岩瀬。一塁が中居、二塁が芝野、三塁が一年生の芝、ショートが関根、レフトが藤原。センターが下田、ライトが海上。』

藤本はそれを聞いて思った、『もう、俺の出る幕は無いな。』

## CHOSHI (第11話)

(令和3年 9月)

9月、約1ヵ月に渡って発令された緊急事態宣言が解除され、10月初旬に関東大会を行うことになった。しかし、茨城県だけは独自の方針で学校間の部活が行えず、県選抜の練習会も実施出来なかった。

9月26日(日)7:45～ 笠間市民球場でやっと第1回目の練習会を行うことが出来た。そして大会は10月2日(土)から埼玉県で行われた。

茨城選抜チームは、他県に比べて合同練習の機会がなかったのに関わらず、決勝トーナメントまで勝ち進んだ。しかし、川口は約1ヵ月の休校があったので、体の感覚を取り戻すのが大変だった。練習会では技術の高さを示すことはできたが、大会での実績が無い川口に登板の機会は巡って来なかった。

決勝トーナメントは10月10日(日)。10月9日(土)に第2回練習会が茨城県常陸大宮市で開催された。しかし、この期間は休校の影響で延期した清真の前期期末考査が行われる週であった。

押見は川口のご両親と連絡をとり、10月9日(土)の練習会の後、テストを受験するために常陸大宮と清真の送迎をお願いした。川口の自宅は銚子にあるので、数百km以上の距離をご両親は何度も行き来した。

押見は川口に大会前に一つだけアドバイスした。『後ろの守備が不安の中、投げているのでどうしても三振をとりにいってしまう。すると力みが出て、ボールが高くなったり、シュート回転したりする。関東大会になれば、三振はとれない。低いボールを投げて、ゴロを打たせ、後ろに守ってもらった方がいい。』

10月10日(日)大宮運動公園。関東大会準決勝。茨城選抜は4-3サヨナラ勝ちしたが、川口は出番がなかった。直後の決勝戦。相手は西東京選抜。

初回、茨城選抜は2点を先制したが、3回に2点、4回に2点を取られて逆転された。午後2時58分。押見の携帯に県東地区中学野球部顧問の先生達で作っているLINEに写真とメッセージが送られてきた。

『川口登板。』川口は2-4で逆転され、なおワンナウト1塁の状況で登板した。押見は思った。『川口は7月の大会以来、試合で投げていない。約3ヵ月投げていない状態で、いきなり関東の決勝のリリーフでは、普通はストライクが入るわけがない。でも…。』

午後3時16分。『しっかり打者一人を打ち取り、降板。』とメールが届いた。川口は2球で、打者をファーストゴロに打ち取り、ダブルプレーで相手の勢いを止めた。

5回裏、茨城選抜は5点を取り7対4で勝ち、優勝した。川口の登板は僅か2球だったが、試合の流れを変える大切な役割を果たした。関東大会で清真の選手がプレーするのはこれが初めてだった。

## CHOSHI (第12話)

(平成30年 11月)

川口には二才上の兄がいる。名前は川口翔平。川口翔平は中学2年(平成30年)の夏から中学野球部の主将だった。

日が暮れるのが早くなり、5時を過ぎるとあたりは真っ暗になっていた。副顧問だった押見は前年から入試広報部長になっていた。昨年度は中学が定員割れ、その状況を打破するため、休みなく外回りをしていた。高校生の受験指導もしていたため、練習に顔を出すことはほとんどできなかった。

11月、久しぶりに練習に行くと、部室から一人出てくる川口(兄)がいた。『先生、みんな休みです。俺一人しかいません。』中学野球部は合同チームを結成して臨んだ10月に行われた新人戦を大敗。その試合の翌日、チーム主軸の選手がシニア野球(硬式のクラブチーム)に入るため部活を辞め、部員は川口(兄)を含めて5人になり、チームはまとまりを欠いていた。

『先生、一人で何をすればいいんですか?』川口(兄)の言葉に、私は返事につまった。素振りや、ランニングなど一人でもできることはある。ただ、川口(兄)が聞いているのはそういうことではない気がした。

『ここにいて野球ができるんですか?』そんな風に聞こえた。

私は、川口(兄)にランニングを指示して、誰もいなくなった部室を見渡した。部室の壁の所々に卒業生が残した寄せ書きがあった。懐かしい名前もある。寄せ書きを見ていると様々な思い出が蘇ってきた。押見は25年前に野球部顧問になった。初めは部員が少なかったが徐々に増え、7年前には18人の新入部員が入部した。しかし、3年前から部員が減り始め、ついに練習に来る部員が2~3名になってしまった。

誰もいない部室の中で押見はふっとある考えが脳裏をよぎった。

『川口もシニアに行った方がいいのでは?』野球は一人ではできない。ピッチャーがいて、その球を受けるキャッチャーがいて、後ろを守る野手がいて…。九人の思いを白球にこめるのが野球だ。一人では野球はできない。

川口(兄)のことを思うのであれば、このチーム以外をすすめるべきなのだろうか。しかし、それでは中学野球部は虎の子の選手を失い、存続はより厳しくなる。部室の壁から卒業生達が『それは駄目だ。』と言っているように感じた。

私は、桜美林高校を甲子園優勝に導き、清真学園の野球部を創った濱田宏美先生の顔を思い浮かべた。『濱田先生だったら、この状況をどうするんだろう。』濱田先生の教えを思い出していると、ある言葉を思い出した。

『夢は叶う。嘘と思えば、甲子園に聞け。』

## CHOSHI (第13話)

令和2年2月、新型コロナウイルスによって全国の学校が一斉休校になった。そして4月、学校が再開されるも、3日後再び長い休校期間に突入した。押見は学校が休校期間に入る前日、3人だけの中学野球部員を入試広報室に呼んだ。

27年間、押見は中学野球部の顧問をしていたが、始めの2年以外はずっと副顧問だった。しかし、この4月から主顧問(監督兼部長)になった。正直、入試広報部長をしながら一人で野球部の顧問するのは無理だと思った。しかし、ある出来事が遠い昔の記憶を思い出させた。

『甲子園大会中止』そのニュースを聞いた夜、大学生に戻った夢を見た。卒業式前日、大学の準硬式野球のチームメイトから将来の夢を聞かれて『甲子園に行きたい』と答えたことを思い出した。

『夢は叶う。嘘と思わば、甲子園に聞け。』

あの時、川口(兄)がシニアに行っていたら……、もし翌年、中学野球部員2名が入部しなければ……、きっと中学野球部はなくなっていただろう。

新型コロナウイルスは球児達から夏の大会も奪い、令和2年は中止。翌年(令和3年)の夏の大会は開催されたが、応援団・チアガールなどの生徒応援は禁止。川口(兄)と同学年の高校球児2人は、夏の大会の雰囲気を経験することのないまま、高校2年の秋を迎えていた。

そんな中、清真学園高校野球部に中学県選抜に選ばれた投手が入部した。

川口颯大。川口翔平の弟だ。正直、県選抜の投手となれば私立の強豪校から誘いがきてもおかしくない。例え誘いがなくても、入部を希望すればきっと受け入れてくれるだろう。しかし、弟は兄のいる清真を選んだ。

さらに新入部員は増え、新高校1年生はマネージャーを含め6人になった。

令和4年6月。サッカー部主将で最後の大会を終えた、清真中野球部で4番を打っていた横山、鹿野中時代シニアで野球をしていた武衛、安藤の3人の高校3年生が加わる。清真学園高校野球部は選手11人、マネージャー2人になった。

部員が揃ったことで、夏の県大会に単独チームで出場することになった。エースは川口颯大だが、受ける捕手は今までは合同チームの選手だった。

兄の川口翔平はずっとショートを守っていた。しかし、この状況で川口颯大の球を受けるのは兄の翔平しかいない。

川口翔平はキャッチャーの防具をつけた。夏の大会まで1ヵ月。清真学園史上初の兄弟バッテリーの誕生だった。

## CHOSHI (第14話)

単独チーム結成の3日後の6月4日。清真学園高校野球部は鹿島学園のグラウンドで行われる県東地区大会に出場した。1回戦の相手は古豪銚田一高。

グラウンドに行くと昨年甲子園に出場した体格の良い鹿島学園の選手達が、完璧なグラウンド整備をしていた。結成間もない清真学園の選手11名は、おどおどしてしまい、場違いな感じさえた。

銚田一高のノックが始まる。洗練されたノックを見て、完全に雰囲気にもまれた。1回の守備。川口(弟)の投球練習が始まると、球場はシーンとなり、銚田一高そして鹿島学園の選手達も川口(弟)のボールに注目した。

川口は中学時代よりも球速を上げていた。MAXは130km/hを超えている。しかし、いきなり先頭バッターに打たれてしまう。そして、むきになってボールがうわずり暴投を続ける。制球が定まらない弟に、キャッチャーの兄も打つ手がない。というより兄も初めてのキャッチャーとしての試合なので、弟を氣遣う余裕もなかった。

バッティングも冴えない。新たに加わった高校3年生の3人は、力んで凡打を繰り返した。試合は大差になり、5回コールドで清真は負けた。結成3日後なので、この結果はある程度見えていた。むしろチームとしての弱点がはっきり分かったことが収穫だった。ここから1ヵ月、久しぶりのチーム練習、そして週末には練習試合が続き、チームは徐々に活気づいてきた。

川口(兄)の高校野球最後の1ヵ月はキャプテンとして、5年分の濃密な時間を送った。同じ目標に向かう6人の高校3年生に囲まれ、慣れないキャッチャーの練習、配球の勉強、エースである弟への指示など、様々なことに考えを巡らせる1ヵ月になった。

また、夏の大会が声を出してはいけないが、応援団・チアガールそして生徒応援も解禁になり、夏の風物詩が帰ってきた。

夏の大会の組み合わせが決まった。1回戦の相手は下館工業。秋・春共に地区大会を勝ち抜き、県大会に出場している。特に秋は県大会の1回戦、古豪水戸工業に競り勝ち、ベスト16に進出している。

『もう少し弱い相手だったら、いいゲームになったかもしれないが、この相手では、コールドにならず9回戦えれば上出来だろう。』押見は日に日に高校球児らしくなっていく選手達を見ながらそう思った。

## CHOSHI (第15話)

令和4年7月11日。ひたちなか市民球場。夏の暑さ、ブラスバンドの演奏、応援団の太鼓。チアガール。夏の大会が戻ってきた。1ヵ月前、ベンチの中は雑然としていた。しかし、今日は一人一人の道具が小分けにされていた。チームの役割分担も出来てきているようだ。試合前のシートノック。選手達はきびきびとした動きを見せ、1ヵ月前のおどおど感はなくなっていた。

初回の攻撃。1番の川口(兄)がいきなりヒットで出塁。得点には結びつかなかったが『打てる』という雰囲気チームに与えた。1回裏、川口(弟)のピッチング。ランナーを出す打たせてとるピッチングを徹底し、後続をダブルプレーに打ち取った。序盤3回は0-0。

4回、5回下館工業は清真のエラーからチャンスを広げ、2点をとった。川口(弟)が崩れそうになると、すかさず川口(兄)がマウンドに駆け寄った。すると、川口(弟)は冷静さを取り戻し、打たせてとるピッチングに徹した。

6回表、清真は2番武衛のヒットからチャンスを作った。4番川口(弟)のフォアボールで2アウト1・3塁。ここで5番の安藤は痛烈なヒットを放った。さらに、1・3塁からダブルスチールで川口(弟)が本塁を陥れ、2-2の同点となった。終盤の8~9回は川口(弟)にとって未知の領域だ。しかし、川口(兄)が相手のサインを読み、盗塁を刺したり、ライトの安藤がファインプレーをするなど、守備に助けられ追加点を許さなかった。

終盤川口(兄)は配球を変え、スライダーを有効に使った。スライダーはベース前でワンバンドすることがあるが、川口(兄)は完璧にとった。まるで弟の球は見なくても捕れるぐらいの感じだった。清真の粘り強い守備で、試合は延長に入った。

10回表、清真は2アウト1・2塁のチャンスを作ったが、いい当たりが正面をついて点数はとれなかった。直後の10回裏、川口はフォアボールを出してしまい、ノーアウト1・2塁のピンチになる。そして136球目、バント処理にミスが出て、清真はサヨナラ負けになった。

試合後、泣き崩れる川口(弟)の横で、涙を見せない川口(兄)がいた。ベンチを出ると、川口君のお母さんに会った。『お爺ちゃん(藤本さん)が翔平はよくやったと言っていました。』と教えてくれた。そして『颯大は最後までお兄ちゃんに助けてもらって。』とつぶやいた。確かにこの試合だけを見れば、そう感じるかもしれない。しかし、私は4年前を思い出した。

もし、私がああ場所に戻れたらこう伝えたい。『川口、清真で野球を続けろ。じきに最高のチームメイトがお前の前に現れる。』兄弟最初で最後の高校野球の競演は、引退する3年生6人と共に、忘れられない思い出を作った。

## CHOSHI (第16話)

(昭和35年)

高校2年の夏の大会が終わり、新チームがスタートした。藤本の肩は満足にはあがらなかったが、『もう一度野球をしたい』という気持ちが強くなり、チームに戻った。秋の大会、藤本はベンチに入ったが、試合に出ることは無かった。グラウンドには銚子一中、銚子四中、飯岡中で活躍した猛者達がおりに、藤本の出番は無いと思われた。

県大会の1回戦、相手は木更津一高。試合は予想外の展開になった。岡本が打ち込まれ、守備にはミスが相次いだ。『このままでは負ける。これでは、甲子園は夢のまた夢だ。』チーム内に焦りが出てきた。そして、中盤にピンチを迎えた時、チームの視線はベンチにいる藤本に向けられた。

監督が藤本に声をかけた。『藤本、投げられるか?』藤本は『はい。』と答えて登板した。

約4ヵ月ぶりのマウンドだった。『この場所に戻ってきた。』野球をやっている者にとって、マウンドから見える景色は特別だ。野球は、ピッチャーの出来が勝敗に大きく左右するスポーツ。大きな責任を託させるゆえに孤独なポジションでもあった。

マウンドにあがった藤本だが、肩の不安は消えていなかった。『覚悟を決めるしかない。』そう思っていると、ショートの間根が近寄って来た。『藤本、俺はお前と甲子園に行く決めてんだ。俺の所に打たせろ。必ずアウトにしてやる。』さらに、横を見るとセカンドの芝野の声が聞こえた。『藤本、お前が銚子のエースだ。後ろは守ってやる。心配するな。』

藤本は覚悟を決めた。『肩はあがらない。でも、7分力なら投げることが出来る。守備を信じて打たせるしかない。』藤本が低めにボールを投げると、バッターは強い打球をショートに打った。そして、ショートの間根がこの打球を捕って、ダブルプレーになり、ピンチをしのいだ。

次の回の攻撃から、銚子商業打線は打ちまくった。藤本が登板し、銚子商業は全く違うチームになった。エースが登板すると、雰囲気ガラッと変わる。野球は不思議なスポーツだ。

この試合、銚子商業は逆転勝ちを収め、ここから銚子商業の快進撃が始まった。藤本は肩の不安をかかえながら全ての試合を投げた。チームは勝ち進み、決勝の千葉経済戦は10-0の圧勝だった。

藤本の抜群のコントロールで打たせてとるピッチングと、鍛えられた守備、そしてお互いがライバルで、その中から生まれたチームワークで銚子商業の野球部は一つにまとまった。銚子商業はここから関東の強豪校の一角になっていく。



## CHOSHI (第17話)

銚子商業は秋の関東大会に出場した。この当時の関東大会は県優勝校しか出場することはできず6校で争われた。一回戦で強豪作新学院と対戦し、銚子商業は接戦の末、0-2で敗れた。優勝はこの作新学院と再試合の死闘を制した、法政二高だった。法政二高には、後に巨人に入団し野手として大活躍をする柴田投手がいた。法政二高は春の甲子園の選抜大会で全国優勝した。

春の県大会が始まる直前、藤本は監督に呼ばれた。『キャッチャーを岩瀬から小知和にする。明日からは、小知和と練習するように。』と告げられた。

『えっ。』藤本は驚いた。小知和の野球技術の高さは小学校の時からよく知っているが、岩瀬とは中学からバッテリーを組んできた。呼吸も合っていたし、リードも上手だったので、打たせてとるピッチングをする藤本には欠かせない存在だった。

『監督、なんでキャッチャーを変えるんですか?』すると、監督は『小知和を主将にする。最後の夏は小知和を要としたチーム作りをする。小知和は元々キャッチャーだ。だったら小知和がキャッチャーの方がいい。』

キャッチャーはピッチャーの女房とも呼ばれるポジションだ。二人の間にしか分からない阿吽の呼吸もある。また、岩瀬は控えのキャッチャーになると小知和が怪我でもしないかぎり、試合に出ることはできない。しかし、監督の方針は絶対だ。藤本は了承して、小知和と練習するようになった。

春も銚子商業の快進撃は続いた。春の県大会決勝は3-1で県立船橋高校に勝ち優勝。関東大会では栃木代表の宇都宮高校を撃破。

迎えた夏の大会。銚子商業は順調に勝ち進んだ。当時、甲子園は千葉県と茨城県から一校しか出場できなかつたので、千葉県を勝ち進んだ2校と茨城県の2校が戦い、勝った学校同士で決勝戦を行うという仕組みだった。

この年の千葉県大会を勝ち上がった2校は銚子商業と同じ銚子にある市立銚子高校だった。市立銚子高校には、藤本の代の一つ下の銚子の有望選手が集まっていた。

準決勝で銚子商業は茨城県の竜ヶ崎一高と対戦した。試合会場は敵地茨城県の水戸だったので、銚子市民は『大漁旗』をトラックに積んで、大勢で茨城県に乗り込んだ。

結果は5-0で銚子商業は快勝。藤本は竜ヶ崎一高打線を完封した。決勝は水戸商業に勝利した市立銚子高校。甲子園をかけた銚子の高校同志の決勝戦となり、銚子の町の熱狂は最高潮に達した。

## CHOSHI (第18話)

### 『銚子商業 対 市立銚子高校』

千葉県・茨城県のトーナメントを勝ち上がってきた2校がどちらも銚子の高校というのは、銚子市民にとってこれ以上ない誇りだった。

銚子商業の選手達は、一つ下の代が主力の市立銚子には負けない自信があった。結果、藤本は完封。4-0で銚子商業は勝ち、3年ぶり2回目の夏の甲子園の出場をはたした。

銚子商業が甲子園に出発する朝、銚子駅には町中の人が集まった。『甲子園でも頑張れよ。』『絶対勝てよ。』『優勝しろよ。』銚子の夢と希望が銚子商業の野球部に託された。

甲子園に行き、甲子園での練習が始まった。初めて見た甲子園はとても広く大きかった。銚子市野球場の観客席は5000席、甲子園は満員になれば6000人が収容できる。ケタ違いのスケールに銚商のメンバーは圧倒された。

僅かな時間の甲子園での練習を終え、ベンチを後にしようとした時、地元大阪の代表、浪商高等学校の選手が甲子園に入ってきた。浪商高等学校は戦争による中断直後の甲子園大会で優勝。その後も全国優勝し高校野球No.1の強豪校だった。現代に例えるなら大阪桐蔭高校のような存在だった。

浪商高等学校は大阪大会6試合で58点を取り、失点は0だった。選手一人一人の体の大きさは銚子商業の選手より、一回り大きかった。さらに、地元ということもあり甲子園でも堂々と、まるで自分達の庭のような立ち振る舞いだった。そして、その中からひとときわオーラを放つ一人の選手がいた。

### 『怪童 尾崎 行雄』

この大会後、高校2年で中退し、プロ野球球団 東映フライヤーズに入団。

一年目20勝。以降入団5年間で98勝。高校出のピッチャーが入団5年間で98勝するのはケタ違いの成績だ。そんな伝説の投手がこの時の浪商のエースだった。

尾崎のピッチング練習が始まった。『バシーン。』藤本も、銚子商業の選手も動きが止まった。『なんだ、この球は…。しかも、速いだけではない。ボールがぐんぐん伸びる。まるで、ピストルの弾丸だ。』

この時代の甲子園に出場するエースのスピードの平均は120~130km/hだったと思われる。そんな中、尾崎は150km/h近いスピードボールを投げている。現在メジャーで活躍している大谷翔平選手が高校時代に地区予選で160km/hを記録して話題になったが、この時の尾崎のスピードボールが世に与えた衝撃はそれを上回るものだった。

藤本は思った。『これは、人間の投げる球じゃない。これが甲子園か。』